

「自分の思い込みをイエス様に押し付けない」

(マタイによる福音書 11:2-11)

洗礼者ヨハネは獄中から弟子を遣わし、主イエスに尋ねさせます。

「あなたは来るべきメシアですか。それとも、他の人を待たなければなりませんか。」

ヨハネは主イエスがメシアだと知っていたはずですが、しかし、彼が待ち望んでいたメシアは、悪を一掃する裁き手でした。ところが、主イエスはいっこうに裁きの火を燃やそうとはしません。ヨハネの心に疑いがもたげます。ヨハネは不信仰だ！と責めることはできません。ヨハネは本気でメシアを待ち望んでいたからこそ、問わずにはいられなかったのです。

ヨハネは牢の中でキリストのなさったことを聞いていました。にもかかわらず彼は、自分が描くメシア像から抜け出せず、主イエスに不満を感じています。そのヨハネに対して、主イエスはヨハネの弟子を遣わして伝えます。

「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」

今日の福音の後半、「預言者以上の者」と言われるヨハネですら、天の国では最も小さな者だと、主イエスは言われます。なぜならそれは、ヨハネがこの福音にまだ与っていなかったからです。主イエスが行う奇跡は言葉によってなされました。「光あれ」という言葉によって神の創造がなされたように、主イエスの言葉に神の力が働き、新しい世界の創造が実現しています。主イエスはヨハネの弟子たちを遣わすことで、あなたがたはもう神の言葉による新しい世界の実現の知らせ、つまり福音を聞き、見ているのだ、ここに天の国が実現しているのだ、とヨハネを福音へと招いたのです。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」と主イエスは言われます。幸いへの道は、自らの思い込みではなく、主イエスに「聞く」ことにはじまります。主イエスの言葉に響く神の言葉に耳を傾けることなく、自らの期待をメシアに押し付けようとするなら、主イエスの真実を掴みそこねてつまずくことになります。しかしその言葉を聞いて、天の国を受け入れるなら、地上で最上の人物であった洗礼者ヨハネをも超えることになります。そこに天の国からの「幸い」があります。降臨節第三主日、「喜びの主日」にあって、自らを「聞く」ことから、幸いから遠ざけているものはなにか振り返り、主からのまことの喜びをいただきたいと願います。